

海外出張報告

第7回鳥インフルエンザ国際シンポジウムに参加して

出張期間：平成21年4月4日～11日

出張場所：米国 ジョージア大学

TSUKAMOTO Kenji

人獣感染症研究チーム 上席研究員 塚本 健司

このたび、米国ジョージア州アセス市にあるジョージア大学で開催された第7回鳥インフルエンザ（AI）国際シンポジウムに参加する機会を得たので、その概要を紹介します。

この会議は、アメリカ農務省南東家禽研究所のSwayne博士と彼の所属する研究所の研究員が主催した関係で、家禽及び野鳥のAIに焦点が当てられていたため、同じ分野で働く私にとって大変興味深い会議でした。延べ4日間の会議は、11のセッションに分かれ、14題の基調講演、59題の口頭発表及び123題のポスター発表から構成されていました。内容としては、世界各国におけるAIの発生状況、新ワクチンの開発、野鳥のサーベイランス、診断法の開発、病原性の解析など、盛りだくさんの研究成果が報告されました。発表演題は全て“Avian Diseases”に審査論文として掲載されるため、発表内容がAvian Diseases関連になっていた傾向があると思いましたが、興味深く聞かせて頂きました。また、二重投稿を回避するため、本会議での発表を行わなかった研究者も実際には多いと思われます。実は私も、別の雑誌に投稿中の論文や特許の関係で、残念ながら最終的に発表を断念しました。

会議で興味深かった点をいくつか紹介します。

1つ目は、トランスジェニックウキグサに発現させたHA蛋白質を、オイルアジュバントと共に鶏に投与すると、高い防御効果が得られた報告です。これ以外に新ワクチンの研究としては、リバーズジェネティックスワクチン、組換え鶏痘ウイ

ルスワクチン、組換えニューカッスル病ウイルスワクチン、組換えマレック病ウイルスワクチンの報告がありました。

2つ目は、サーベイランスに関する発表です。世界各国で野鳥のサーベイランスが行われていますが、関係する研究者のほとんどが、H5N1ウイルスは野鳥に定着してはならず、野鳥は養殖アヒルから感染したと考えていることでした。その一方で、ロシアの研究者が中央シベリアのカモからH5N1ウイルスに対する高い抗体を検出しており、カモにH5N1ウイルスが定着している可能性も否定できません。

3つ目は、遺伝子診断に関する報告です。欧米ではウイルス分離法よりも遺伝子検査法が野鳥サーベイランスに当初から利用されており、標準化が求められています。しかし、現在の世界標準法はH5、H7遺伝子を幅広く検出できるものではなく、理念と現実にギャップがあるように思いました。一方、我々が開発した遺伝子検査法を世界で利用してもらうためには一層の努力が必要かもしれません。

最後に、現在動衛研で行われている鳥インフルエンザ研究は国際レベルにあると感じましたが、国際貢献としては一層の工夫が必要だと感じました。この点は、長い年月をかけて達成していくことが求められていることであり、動衛研の研究者に共通の課題かもしれません。

本会議への出席に際し、ご支援を頂きました皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。